



溫故日錄

三



曾
13
3

5
13
3



浴扇

一日 孟夏自此時也。是ハ天子夏此季此所^ハたはる
 けり。不臣下^{臣下}ハ清酒と^ハひ政と^ハきこ^ハう^ハた義也
 公^ハ不^ハや^ハ旬^ハは^ハ色^ハく^ハる^ハ内^ハ裏^ハあ^ハう^ハく^ハは^ハく^ハて^ハは
 たり^ハて^ハ南^ハ殿^ハて^ハ初^ハり^ハせ^ハる^ハふ^ハは^ハ新^ハ所^ハ此^ハ旬^ハと^ハり
 位^ハ又^ハけ^ハり^ハせ^ハ給^ハく^ハは^ハり^ハわ^ハく^ハ政^ハの^ハそ^ハの^ハふ^ハと^ハん^ハ可^ハ授^ハ旬
 と^ハり^ハ十一月^ハ一日^ハ冬至^ハよ^ハわ^ハる^ハ年^ハ初^ハり^ハく^ハと^ハも^ハ朔^ハ旦^ハの
 旬^ハと^ハり^ハ夏^ハれ^ハる^ハし^ハた^ハと^ハな^ハり^ハく^ハは^ハ孟^ハ夏^ハの^ハ旬^ハと^ハり
 冬^ハの^ハち^ハり^ハと^ハも^ハ孟^ハを^ハ此^ハ旬^ハと^ハり^ハや^ハけ^ハ夏^ハ免^ハ此^ハと^ハり
 孟^ハ乃^ハ旬^ハと^ハり^ハ也^ハけ^ハ孟^ハ夏^ハ此^ハ旬^ハよ^ハハ^ハ二^ハ献^ハ此^ハ後^ハ内^ハ侍^ハ扇
 と^ハ入^ハあ^ハる^ハ初^ハん^ハく^ハ孤^ハ持^ハく^ハ侍^ハ屏^ハ凡^ハ此^ハ南^ハの^ハち^ハよ^ハ孟^ハと^ハる
 を^ハ出^ハ座^ハ此^ハ次^ハ將^ハと^ハり^ハて^ハ玉^ハの^ハ座^ハ此^ハま^ハよ^ハは^ハく^ハて^ハ扇^ハ公
 わ^ハら^ハに^ハま^ハよ^ハし^ハ座^ハの^ハ拜^ハと^ハいて^ハ與^ハあ^ハる^ハ事^ハよ^ハく^ハ我^ハ今^ハハ^ハ旬
 此^ハ義^ハ終^ハ果^ハく^ハ陣^ハの^ハ座^ハよ^ハて^ハ平^ハ座^ハと^ハり^ハ初^ハり^ハ公^ハ事^ハ根^ハ源
 天^ハ武^ハ天^ハ皇^ハ十^ハ二^ハ年^ハよ^ハ始^ハと^ハり^ハん^ハ年^ハ中^ハ行^ハ事^ハ齊^ハ合^ハ二

と^ハり^ハ人^ハの^ハは^ハく^ハる^ハ神^ハふ^ハり^ハま^ハり^ハた^ハま^ハふ^ハ座^ハの^ハ凡^ハも^ハり^ハて^ハけ^ハる

大神祭

上^ハ卯^ハ日 是^ハハ^ハと^ハの^ハ卯^ハ此^ハ日^ハ初^ハり^ハり^ハ卯^ハ日^ハ卯^ハ日
 三^ハあ^ハり^ハハ^ハ中^ハの^ハふ^ハあ^ハる^ハ一^ハ先^ハ世^ハ日^ハ使^ハり^ハ大^ハ原^ハ野^ハの
 こ^ハし^ハ一^ハび^ハ祭^ハ冬^ハハ^ハと^ハ此^ハ日^ハ使^ハり^ハ其^ハ故^ハハ^ハ夏^ハハ^ハ卯^ハ日^ハの
 曉^ハ冬^ハハ^ハ夕^ハよ^ハま^ハつ^ハる^ハ夜^ハ也^ハ大^ハ神^ハと^ハは^ハ三^ハ輪^ハ此^ハ神^ハ也^ハ大^ハ物^ハ
 主^ハの^ハ神^ハ乃^ハ沖^ハ事^ハ也^ハ三^ハ輪^ハと^ハり^ハ本^ハ縁^ハハ^ハ卯^ハ一^ハこ^ハ乃^ハ大^ハ物
 主^ハ神^ハ活^ハ玉^ハ依^ハ姫^ハと^ハり^ハ女^ハ乃^ハと^ハり^ハ志^ハの^ハひ^ハか^ハう^ハく^ハせ^ハ給^ハる
 時^ハあ^ハる^ハ人^ハさ^ハう^ハん^ハな^ハり^ハき^ハま^ハる^ハ女^ハ懐^ハ妊^ハよ^ハ及^ハひ^ハく^ハ父母^ハ
 ら^ハり^ハひ^ハめ^ハや^ハ一^ハび^ハ誰^ハ人^ハ常^ハよ^ハき^ハ師^ハ一^ハき^ハと^ハひ^ハ女^ハよ^ハ同
 を^ハれ^ハて^ハこ^ハの^ハ日^ハ比^ハ人^ハ乃^ハか^ハら^ハる^ハと^ハり^ハ此^ハ家^ハの^ハや^ハ孫^ハより^ハ来
 て^ハま^ハり^ハと^ハり^ハひ^ハう^ハ一^ハ竹^ハり^ハき^ハと^ハり^ハよ^ハ父母^ハ是^ハと^ハり^ハあ^ハる^ハ
 さん^ハこ^ハが^ハひ^ハく^ハ布^ハと^ハり^ハひ^ハ紙^ハ屋^ハよ^ハり^ハて^ハ針^ハと^ハつ^ハて
 女^ハよ^ハか^ハら^ハり^ハて^ハい^ハく^ハび^ハ度^ハく^ハ此^ハ神^ハ人^ハ乃^ハき^ハ師^ハ一^ハめ^ハん^ハと
 玉^ハ一^ハび^ハ針^ハと^ハり^ハて^ハま^ハり^ハる^ハ衣^ハ此^ハす^ハと^ハり^ハは^ハく^ハと^ハり^ハん^ハき^ハら

女を以て其まゝめてはく 河多系と云は溢る
穴よりと成つて節渡山吉野山とて三室山
と云ふりきりひ時をりて大物主神と云ふらぬし
それ系くらのけらまて三三三三三三三三三三
りきる舊事本記よ及及びりやうよおろし
ひ祭ハ貞観乃時よりけりまをりや 公事根
年中行事一哥合よ

りる系と云やまてんいのみおねは神のまよりなり
は三輪の明神ハ社もなくて祭日ハ茅輪と三三
りて岩の上よとてとまてんまてん社乃おろし
や一とて里れをれもあけよりてはく三三三三
鳥百千いてありてふひやよりまてんらてそれ本も
とは各くくくゆれよりふより其後神れらひ
ア〜〜〜〜〜奥儀抄ハ岩ハ二此鳥井の内よ

ち〜の枚りり其所よあり堀河次郎百首よ兼昌

哥云

東は〜な〜〜〜さハ三輪社乃ある〜
但神代卷上四十一枚云吾ハ日本国三諸山よ住
思ぬ故に即宮と彼處よ宮就居まじ此大三輪
神也云云略記之この説の如きと三輪社ありと
るの詞林採葉抄ニ云太神宮、祢宜、部、廣
成撰古語拾遺曰大己貴神大和国城
上郡大三輪神是也云云
新後撰集後成哥云

稻荷祭

同日ハ神社建立此縁起又まより此盤觴
也取見〜〜〜彼社此祢宜祝の説ハ
和銅年中よ〜〜伊奈利山よあ〜

きりところや或ハ弘法大師の東寺此門前より稲
あひくる老翁よあひのいきくると東寺此鎮守よ
勸請ヤされくるとり説もゆる延きていなりと
稲と荷とわさるるともや 公事根源 延喜式神
名帳ニ云ク稲荷ノ神社三座下社大山祇中社倉
稻麩上社土祖神この神ハ百穀と播一
路ふれよ稲荷とより由ト部乃記よりり

山科祭

上巳日 びる一ツハ宮道氏此祖神也寛
平十年より祭ハくまると 公事根源 當日
使立 拾芥抄 十一月と度あり

平野祭

上申日 延暦よび神社とハ造立ありて
貞観よりの祭礼とハ始りてふとて弁内
侍びふ近衛のさうひひと見参と取て内よま
つて奏寸臨時乃祭りり五位此殿上人使と此と

ひを湯此舞人きとふ使あり湯幣なり賀後の時
時の祭のこゝ此臨時乃祭ハ寛和元年四月十日より
はりり其時此使ハ左湯門權佐藤原惟成なり
さく免く一才乃御殿ハ源氏才二ハ平氏才三ハ高
階氏才四ハ大江氏才五ハ姓乃祖神とてま
かへし 公事根源 十一月と度あり年中行
事哥合小

松尾祭

同日今ハ酉日 此祭も貞観年中よりま
る大寶元年よ秦の都理とていなりりり
神殿と建立しきくともや 大山咋神乃侍事也
比叡山此神と同躰とてま
十二月と二度より年中行事哥合よ
二紫さんまのあひあひまつよかりてきまわらん

臺盤所よりついでさうれも蓋人よりて殿上の臺盤
 所のうまをくと達部りゆ勢れられづくこを持
 て御殿のかけりとのある自木の机よましく次
 第小座よけく浄務の浄ふせりて成をくる不參れ
 人のよせハ蓋人をく浄導師の僧まりのやりて
 佛前れ作法をりく鉢の水と一りくもあせま
 先浄導師くえん仏す公卿次第よすこて芳成
 膝行していさる成りて水を汲て灌佛して
 後礼佛寸導師よせめくちりて此佛生會は
 撫古天皇よりりゆる釈迦如來れ俱毘藍城よて
 されぬいきる時天降下て水とそき尺るよあふ
 せりり事と也公事根源 国史仁明 兼和七年
 四月八日請律師傳燈大法師位靜安於清凉

殿始行灌佛より諸寺よとこなる佛生會
 ハ推古天皇よりりて灌佛こて内裏并り
 親王大臣家までをこりりハ兼和七年より始也
 灌佛乃布施ハ昔ハ錢を用ゆる成中比ハ成
 になされぬりふなづこ名けりり 花多傳情 布施の儀
 の貞救河海よ委新續古今ニ前大僧正慈鎮哥
 百あれりのこあれれ内は仏の力をもな成すこ
拾集才四 けきくも印存のちりり成やこれに仏生れたし

雁鳥入鳥屋 同日

雁鳥鳥屋籠

鳥屋雁鳥

も夏也鶯のちは難

也句神よ

替毛雁鳥

或ハ五

〜〜

月吉祭

中申日此社ハ松尾乃社ニ同神也よるり
長久四年六月八日よるりて廿二社の内

五文卷四

葵

一向はみわれ此
の物也 八雲

二葉草

葵と二葉草 諸葉草
も賀茂乃神山

系々々々 浅形の日此神 賀茂乃神山
なつてひく花成りてあふ草とは別也新後撰集
雜上賀茂經久哥
神心よとれ花成かきよ三葉草三れくわれ花成たつて

諸葉草

引哥
おらむ

吉田祭

中子日 此社ハ中納言山蔭郷 貞觀の江
りひ建立して一除院永延元年「らり」先
て官幣をとめてまつてせ給ふ春日の社と同躰なり
奈良の京代時ハ春日社長岡京の時ハ大原野
今平安城代時ハ吉田社なりこれ帝都らり此花成志
くし御門とまつりなむせはなふくやされハ浅堂代用白

の法成寺に吉田社と云ふありけり幸ハ貞福寺

去日社にかりひとせられきくそくそくきたまつる 公事

子二下子 拾芥 十一月に二度あり年中仍事哥合兼滋

白らせ成くや写られ花成てくそふたれ神まつる

筑摩祭

初午日 伊勢物語

愚見抄 後成恩寺 兼良公作 云拾遺第九上句いつか
はくまはまつりてせめんこはり江州筑摩大明神の

まつり母ハ逢ふる男れ教りて堀をいへてきて女のま

取也今業云近江國湖乃東北濱邊は且書こ云

名所乃南十余町迄て筑摩此花ありけ村の明

神れまつりハ四月廿日也とれ村の女も我が男と
くむ教りて土堀を掘りて板をこらめててくまて
まつりの場とくくく男とくく教をわくを耐したらまつ

神罰とがうらとや是すまら罪障さんげり
めたすうけ神れが便しあうとをじう一婦婦はら
しあまこれ男をせり事とらら、大なる堀ひらけ
うごまうつ男れ教やど小堀とけらりて大堀よ入まふ
てくめ成やてりば神慮よりひきてこらびり
あやこれ小堀のくづきいでて血をくらきくかん中比
よハ常れ鍋とつごまてそりぐを代りめ比ハまき
も絶そそく神祭もなれどこころりから所の人を
ちくまそふし哥よハけまきつり筑れ字筑紫筑前
こ云がどくちとけと五音相通也ハ雲御抄よく
神にあり清輔集よ寄社戀
六帖六
又源氏玉ころれ巻の引弁よ
六帖
けまはるる新草れらるるまきと新もあまのま

後拾遺

あま事ハはらよの神よありとてわら此教よいまりよま
十五番哥合内大臣哥の哥枕後教

撰吉貝

三枝祭

合よのせり三枝の花をちりて酒樽とこる

う故よ三枝れ祭とはり也これ祭り二月の率川の
祭とおめり切とまらるる神祇合よ孟夏の祭り
くひよのせりハ先其こく四月の雨よりゆるるを
率川祭ハ左大臣是公此建立とり口傳伝事こた
けつるをれ事也此故ハ合とり書淡海公れらるハ
まきく養老年中よ養覧せり是公此大臣は
淡海公れ曾孫とすてよ合よ率川社と伝をれ
是公れらりめて建立ハこくわらるるよや養老以前

品文系口

短夜 明易夜 明安月

五月待 五月まうの卯月 宗祇注

麥ガク秋アキ 秋アキと云ふ四月の名也百穀ヒャクコクこゝろ生ずる時トキ成ナリ春ハルとて其コノ熟マツルする故ユヘ四

月ツキと秋アキとすハくハ存ゾク合カヒよクるハまハ本ホ第ダイ八ハチ

ちチ秋アキふフ蟬セミれレ初ハジメとト思オモゆユらラもモ今イマとト麦マキ秋アキとト思オモゆユ

麦マキ秋アキ風カゼ 俊頼家集スネノリノイハ

夫木ツキ前マヘ大納言ダイナゴン隆房リウボウ卿哥ケイカ

ハ秋アキアア河カ本ホ下カ麦マキ秋アキ風カゼ吹フかカてテ風カゼはハ秋アキわワるルふフもモあアらラ不フ

麥マキ 一ヒト苗スエ

夫木ツキ才サイ世セ五イ西行サイキョウ哥カ云クニ

牡丹 或ハサ日草サニクサとも和訓ワクンサ日サニとトカカさサりリてテ咲サキ花ハナ也ナリ

詞花集ジカウシュウ牡丹トウダンとトよヨめメるル哥カとトいイふフ哥カとトいイふフ宗養ソウヤウ

牡丹トウダン句クサ日サニあアまマりリきキやヤ我ワ名ナとトすス是コノ草クサ又マタ芍薬シャクヤク也ナリ

詩經シキョウのノ点テンとトいイふフ云クニ新式シンシキ抄物セウモノハサ日草サニクサ

ハハ芍薬シャクヤク也ナリ牡丹トウダンとトいイふフ一ヒト草クサ二ニ名ナ又マタ二ニ草クサ一ヒト名ナ也ナリ

云クニ其コノ外ソト異名イナミナとトいイふフ名ナ取トル草クサ千代見チヤイミ草クサとトいイふフ宗養ソウヤウ

近代キナダイ用捨寸ヨウゼツン 每言抄ミツコトセウ 但可タダカニ依ヨリ作者ソウシャ 宗養ソウヤウ句ク

杜若 杜若牡丹哥トウニョトウダンカ題チ雖スレ兩説リウセツ

依景物ヨリキョウモノ少シ夏ナツ入イ之ノ新式シンシキ

葵 細流ホソナガ云クニ葵アオイハ必日カナラシメ日向ヒナカ物也モノナリ衛足エイソクとトてテ身ミとトたタらラたタ

る物也モノナリ河海抄カウカウセウ云クニ葵アオイハ日ヒよヨいイひヒくク紫ムラサキとトいイふフ也ナリ

根とつ寸とれし孔子曰鮑莊子智不及葵能衛
 其足云云心其比鮑莊罪とせん事ありて足
 削然ハ葵ハ二葉ハ以葉其とくとカド
 て用心する故ハ無難鮑莊ハ足ハ用心をたるとあさ
 ける詞也文集第十三傾心向日葵畧記之衛
 足乃葵ハ二葉ハありす云云辨引抄ニ云葵ハ朝郊
 時ハ東よびく牛時ハ南よびく西時ハ西よびく
 日乃あるか之花が傾とれ也文選廿九陸士衡園葵
 詩種葵北園中葵生鬱萋々朝采不東北傾
 類西南晞註李善曰淮南子曰葵ハ於道猶葵
 之與カカラ
 官 かつぢひ 催馬樂ハありかつぢひ
 二京塵愚案抄

葵

葵

後撰 葵ハ五月云云

違ハハるゝと云ものも人れらるゝのこそれと云いと云
 此ハあやしき方をいりりもひをた人の思ふ心とひら
 ハ泥をのふくをたをまはせれいよまよとあり 眞儀抄
 順和名泥といふ字とひらとよひくをたをまはせれいよまよとあり

葵

卵花

木也新式 澁疏 ともろりも夏也

若楓

青楓ハこりまよる ともろり 流布

若葉

春夏有兩説加花者為春然而夏 季木切之間可為夏云云 新式 一ノ花

温故卷四

紅葉

夏葉

夏葉と虫のさしてあつく成る事
いつり萬葉は病葉ともす

茂

草木もよまきるといふ夏也三月よもする志ひる野ふ
うなしくなきて成る野に志きるも夏しく(初)は打越

茂合林下葉

も夏也 流布

木下闇

非夜 分

青木立

每言抄嫌詞よ出でり六百番哥合ニ季経
秋原すばしなれき本立色なりても竹とくすうれ

常盤木落葉

郭公

鶯花藤霞あつくむとくも夏也杜鵑ハ弥生
未つこよりりりて五月もすもまつやうす

四手田長時鳥

千五百番哥合ニ家長哥云

是れ八月前大納言忠良
又月夜のさうりれ月の初りもあけあけひ時乃をたふ
あふあふていつのあふやうし知年さぬこそ初まはしん

明題
なすくよめと不好事也但作者よよる

蝙蝠

夜分也又源氏紅葉賀よつりけえたりん
是ハ扇の事也又清

少納言記よもひり
魚乃さゝめる扇也共よ夏也新撰六帖衣笠内ナ
臣哥云

日々れハ初は花ふりりあはれの風もす
和泉式部家集よ

人さなくもあふんゆきまはけらりも君もさふらん
伏カキリ翼カキリそらけりらる
右三首ハ只蝙蝠乃哥也拾玉集第三カクりらる
しめり
モトヨム
わらわらり

知リ花ノ衣 表白
裏青

蟬リ羽衣

裏乃なれす一此惣名之桃花葉葉小あり
或ハ表檜皮色トシ裏ハ青き由ト異説一
まろせト首夏乃哥

ナリたあまうこらり

温故日録巻第五

五月

献葛蒲

三日 昔月葛蒲ラハ四日也 昔月蓬 同
左右乃边衛兵衛衛門ハ六府あやめ此輿ト

南殿此階乃東西よりまきこ町乃花紙抄よりまき
一くまき四日ハあさるまきわ此庭ハ是をい 主殿
寮取こ小まきぬ少く天平十九年五月より詔ありて
百官諸人悉く葛蒲此藻をわく一々まきんりの
宮中よ入庭うすこまき弘仁式も葛蒲よりも
まき花かり三日ハ早且ハ南殿此前よりまきこりり公
事根源 雲圖抄ハ圖あり拾遺愚負外上よ
まきといハまきまきまきまきまきまきまきまきまき

袖中抄=委新撰六帖=衣笠内大臣

五月鏡 チリチリ 揚州乃長吏船フネよりりて揚子江ヨシキに浮ウて五
月五日日午ヒトにあつる時揚州代銅ドウを百ヒの
鍊ウて舟中波乃とよして一ヒ鏡と鑄也是を百鍊

鏡と云也事文類聚鏡門詳也玉葉集云後堀
川院御時五月五日こいふ事とよのちのころふ
よもを釣きくよにけりまつりきる爲家

伊予國として樂府哥百鍊鏡 能目法師
六月あよとるまふひとこへつてくよよとゆまふり

仁安二年八月經成つ家哥合月 祝部成伸
てし月を彼のうへてとる何そすはしとるころする

は哥判者清輔朝臣云右百鍊鏡乃心ココロや彼乃

く此月まよした一側秋潭水よとるころす侍をんり云

江よはあく舟れ中よてむりく色んくく月乃くこ
此哥も百鍊鑑乃心也 藻塩草

標ハシラ葉ハ佩イ之ノ避カ惡ク 清少納言枕双紙ニハ標

此事とよよ必五月五日よあふおりといひ今
とが田舎よハ端午チノヒに標葉とわよかきん

事あり俗よはんるん此事といひれ

賀茂競馬カモキョウバ 競キョウ此字とまよふとよひ之朔日よ馬乃足と
着キろろえく一二ヒ番とささめ五日よ装束マツルは

木こて馬場ウマバ此左よ楓カエデの本あり是ころらうて落

殿テンりて五月六日競馬騎射キヤクセツ乃事ありて五位

以上走馬とせむるより延喜式よりさくら花鳥餘情云五月五日代節天皇あやめれくくくくけのて武徳殿へ行幸ありて内弁外弁等とら志の宮内省菅蒲と献寸内侍女爲人續命縷と群臣より三献をりて六府騎射の事ありと五日ハ五位以上此人代もする馬よ衆六日ハ寮乃御馬よ衆て競馬ハ事あり云今賀茂とて朝日ありと五日ハ競馬とていりて此騎射競馬の儀式ありとてや下學集ハ擬とて那り競渡とて悦目抄よ
らちの内まらるる物からまけのさる物あはれいらの折るきとていりてはれはれはれとて我とてあてれとていりてはれはれはれとて夫木源仲正哥也同集祭主輔親
つとていりてはれはれはれとていりてはれはれはれとていりてはれはれはれとて

五月雨 梅雨

この五月雨と云梅れきとて
つとては梅雨と云也本草綱目梅雨或ハ作徽雨猶委文集十六衣濕黄梅雨裡行ありとて初學記云梅熟雨江東呼曰黄梅雨とて言抄云梅雨近來この雨とて詞也いりてはれはれはれとて夢庵乃のりなるといりてはれはれはれとて然但發句はれとていりてはれはれはれとて百韻なると宗養乃のりなるといりてはれはれはれとて

花落栗

紫野今宮祭

九月 今十廿日也公事根源云是は疫
衛乃神也正曆五年長保二年天下
とていりてはれはれはれとていりてはれはれはれとていりてはれはれはれとて
と詠して奉りてはれはれはれとていりてはれはれはれとて

そ水鏡 藤原長能

白妙れとよみくろくはらりらていひを神は紫のりや
今よりハあふるんはまな花の都は座りりさるる川
此年一或人云よの中さりりりりりハ船恩のふよ今
宮さふ神を祝ておちやをも神馬をりけとらん云はるる
蟬始鳴 日今よハ夏至節ニありと天慶二年二月貫
之家哥合初夏れ哥よもよありと

水草ノ花

夏也

萍ノ花

夏也

花薦

能目ガ哥枕ニ云くつとハこり
よふこもれ花と花ふこもり

薦川

夏也 只真薦こり
ハ雜こり 流布

藻ノ花

塩海ハ藻よハあふ河上ハ
いつも乃花こり 八雲御抄

其又藻

和布川

ハ夏也若和布ハ春也 和布ハ雜也 新式
かやりの事其月く乃部ハ引こをて

水葱花

古奈伎我花

百合

新撰六帖ハ野ハゆり花といつり万葉よ
さゆり花源氏辨ハさゆりをさるるもいつり

紫陽草

四比良ハ花こも螢かよよ合より拾遺愚草上
あづさハ下紫よすこ螢とハよひれ敷のそつと

五文巻

未摘花

紅花ハ未よりさけハヤリてすとらけむされハ未摘花とあり頭註蜜勘新撰六帖ハ紅の未と云云御抄

忘草花

花なくハ雜也流布住吉代景物也八雲御抄
わかれ草普通ハ軒あり住吉乃岸ヨ生

毛詩伯兮篇認草乃注ハ通秋
曰認草今人忘憂云云又晉康養生論云合歡

蠲忿護草忘憂こつり注ハ萱草也云云又河
海抄ニ云毛詩ニ云北堂栽萱草能忘憂ハ少小

萱草と忘草ニ云也住吉代岸乃忘草ハ萱草
也今ハ神供と云草として供すと云云花鳥

餘情ハ忘草ハ忍草乃一名也又萱草と忘憂
草と云ハはきて忘草ともいひはきも相違

まかり猶奥儀抄袖中抄なると
さらくといへると普通ハ萱草といひ

甲苗

ハムリ

田歌

田植

植物ヲ
越を嫌

田草取

引とも藻塩草ハ六月ヨ引
とも引とも合せると

若苗

若早苗

初苗

かやれ事ハとて不及注すたよりハ
ハ初若引ハ字ハ

松虫七月の部ハあはれ松虫ハ初を
類と云ふ事ト也自余准之ハ

乃の秋ハ何を則又別ハあきと
乃とも香乃ハ初若乃詞ハ未ハ

但三月ヨハ初若乃詞ハ未ハ

乃とも香乃ハ初若乃詞ハ未ハ

三月はともとのハ大く初月より一あり但先例は
もろせて申此月よりする事もあるがー其中は初と
ふ訥なるといふをどれをど始月より別よ又あきく
部立つんげんをー但花のつがと初花をとい二月より
ー只花ハ三月よりあきく連哥はハさやうたま
うたる事ハ一してあきくあきくあきく只時節く
相遠るさやうよえとれハさなるる色ー
これいへり童蒙れたのころ人さるべー

初花

内膳司供早花ハ此月の四日
山城國御園二所供也と拾芥抄あり

若竹

竹若葉 竹若緑
今年生竹

橘

ハみ母と本ことを一云
櫻といすいとも夏也

常世花

なまよもいり
後鳥羽院乃

御哥よふつるこころ花のつあれやなまよめるハ橘
あきく是ハ春花也鷹乃うるあきくこころいへり

花

くらやーとらやーのひくも夏也
毎言抄 花こまらハ雜也

荊棘花

木也花はじこが
てハ雜也 流布

棟

音ハ練歳時記云凡一年中花信風二十四番始
于梅花終于棟花曰日本ノ俗作ス棟或名曰

見草也
梅と凡はくして白ハ櫻哉 宗祇

青梅

不好訥
也云

臘梅

金葉集よ
紫くればはけりともんでけくもたけくこころ梅よわらよ

一ノ雲

水雞 声れ扣^ノ戸^ヲの似
く^ノ也 八雲

水鳥巢 大形
夏也

鴨子 鴨の子を鴨^ノ子^ト呼^フる子^トも鴨^ノ子^ト共^ニ呼^フる^トも
ハ五音相通也花鳥餘情ある此注あり

鳥替毛 諸鳥乃毛と
か^クる^トも夏也

羽脫鳥 夏も大^ニ浴^スる^トは^ノぬ^キを^ハり^しも^ハ此^ノ羽^ノ力^ノ也
新撰六帖^ニ為^シ家^ノ哥^ト也雜^トと^シ一^ノ説^{アリ}あり^其

義非也夏也同集^ニ水鳥^ハ此^ノ哥^ト知^ル家

鶉河 今^ハも^ハこ^ノぬ^けふ^もあ^まき^るも^ハ殊^ニよ^リと^ナる^トハ^ハ大^ノ井^ノ柱
宇治^ノ鶉^ノ河^等也 八雲御抄^ノ河^とあ^るよ^りと^ナる

以^テ而^シハ^ハり^し又^モ鶉^トと^シけ^ルハ^ハ關^ノ此^ノ夜^ノの
也^也也^也され^ハハ^ハ月^トと^シて^ハと^ナり^し藻^ノ塩^ノ草

鶉飼 鶉飼 鶉飼
鶉飼 鶉飼 鶉飼

鶉舟 鶉舟 鶉舟
鶉舟 鶉舟 鶉舟

鶉繩 鶉繩 鶉繩
鶉繩 鶉繩 鶉繩

鮎 夏也若鮎^ハ春也
鮎^ハ秋也新式
魚梁^ハ夏也流布
魚梁^ハ紹^ノ巴^ノ千^ノ句

魚梁 魚梁 魚梁
魚梁 魚梁 魚梁

螢 夏也秋^トと^シて^ハ説^{アリ}あり^ハ理^トと^シて^ハ尋^メる^ト也
流布

蚊 蚊^ハ秋^トと^シて^ハ説^{アリ}あり^ハ理^トと^シて^ハ尋^メる^ト也
流布

鶯カミノ 俗鳥

蚕カミノ 字

鹿子

新式抄物子鹿の子乃声をしくは秋しも
かゝるこさかといり但師説は夏なり

獸狩

かのこもく 認狩 獸此事也夏也 新式 同上 新
式抄ニ云鹿子ちと取事夜分也

照射

夏乃の糸くさしたぐりこいふ物小火とこきりて
夏心あふふいさハ鹿其火は月と見えあはるは
ういといてういハ雲御抄云矢ハ火と指具してと
とら〜〜〜也云云

火串刺

夏の類れ 夏也 流布

標衣

温故目錄卷第六

水無月

林鐘 鐘或作鐘六月律多り妄言抄は嫌詞よ
そらり但〜〜此孫の訓所出味ク詳

氷室

主水司四月一日より九月盡まで是と奠
〜〜六月一日と肝要の用也延喜主

水司式曰凡供御氷者起四月朔日盡九月晦日

其四九月日別一駄以八顯為一駄五八月二駄四顯六

七月三駄又曰凡供中宮氷者五八月日四顯六七月

六顯今案六七月乃あつて時ハ加増して主水司よ

是と〜〜也 花鳥餘情

又木ニ爲相哥よ

しらえたるきつらりなれはめりしはそなたよと云存まて
題ハ四月一日癸氷水と云り公事根源云昔仁徳天皇
乃御宇六十二年五月日額田大中彦皇子御鶏
野之云取は狩し出給て山は乃り野中をて
皇孫一ハ菴を他りし様ある前も一人と云り
見て給ふ窟也と云り其時かの山はあつりよは人
かしてとてせ給ふ氷室なりと云り皇子の
その氷をばはつておさめしめ給て云土
派一丈あり堀てくさばそのふ小藟て茅萱
なり厚取敷てくさつとをさめ給ふ氷てい
ちる大旱ももくけど是を取て熱月よりわ
こかん其時皇子は氷と仁徳此聖乃御門奉
終もきハたのめりぬ穀感と云り由やまて文
よとのせり是氷とせ給始其後季冬とよ是

おさつて固く取よ氷室と置き給也

堀川百首は氷室此哥云仲實

氏きれ母ふ大のちりおさめる氷室を今もたせり
氷室乃を取ハ清輔初学抄をよみたり夫木中勢親王
いみはれはあつりしを氷室は清膳にそりり

熱月なれハ清膳よ氷
と用るはひのおれと

堀河百首氷室哥後頼

皇れことれ末れはさハきつて氷室よおりの
すさこれ代の水は清膳ふらりしをわひそりり
夫木少御内侍哥也同集為細心哥云

氷水 涼氏 夏此卷も氷水ゆす事たり細流云
ひや 瓶も也枕双流よ云いりくあつて書中

いりあつたつて成てんと扇れ風をぬく
——てわくくさり
杜子羨納涼詩

公子調氷水
佳人雪藕絲

醴酒

朔日 一取さけはきふけきよおとを供するま
一取さけらる竹葉の酒なれ一取さけと中し
こまけも式の文より昔ハ口中よ未を嚼て宿を
こ酒よ作きこやこの酒ハ造酒司をふり七月世
日きて日毎よきりなり應神天皇の御時より
こ酒を酒にけり事もけ時は百濟の
人わたりてけりけり是よりさき酒と
ふ物なりと人ゆきと神代は素盞鳥尊稲田姫
乃こめは大蛇とこりさき時ハ一取の酒と化
る事日本紀に見こりさき酒と云事神

代よりさき酒と云 公事根源 但御物忌不供
芬抄 年中行事 哥合よ

月次祭

十一月 是ハ先神今食以前と神祇官此
北門より東の掖よ着て供神物具否と云
ぬ次ハ廳よけきて事を祈ぬ神祇官禱詞
ハ祝師祝の座よけく本官人より木綿とけり
るり上壇下此薦座よけく清巫幣物と云
此儀ありこまハ六月十二月ハ二度 諸社へ御幣
公事根源 年中行事 哥合よ

祇園會

七月十四日兩日 此祭ハ林示中ハことちり
事あり馬長なとりけりけりハさるれ

神覽ハたり祇園此社ハ貞觀十一年ト託宣ノこと
 ありて山城國ノハミツクヤ素盞烏尊
 此童部ニシテ牛頭天皇共武塔天神ニモヤ也
 昔武塔天神南海ノ女ミとよハヒメハチ守時
 日暮テ路レヤミヨ宿とかり給ふハカノ小蘓
 民將來巨且將來ト云二人此ノあり兄才トク
 けりケル兄ハミツク才ハト然リケル母天神ヤコ
 才ノお来ヨかり給ふハミツクヤ兄弟此蘓民
 ヲしらたり則クミツク栗クク座ケテ栗此飯
 とミツク其後八年ト云武塔天神ハミツクらの御
 子と引ケテカレ兄ノ蘓民ク家ヨツケリ給テ一夜ノ
 宿とケル事ト慌トセ給テ恩と報ギントテ蘓民ノ
 弟梅とケル一トノハミツクノ夜ヨリ疫癘天下ト
 して人民死ス事數ト云ルハミツクノ時ト蘓民ト
 ありケル後ハ武塔天神我ハ速須佐維神カトト
 のたまふ今ヨリ後疫病天下ヨおケル時ト蘓民
 將來此子孫也トシテ弟輪とケルハ此災難トケ
 キンこのハミツクヤ又祇園ノ縁起ヨトケ
 いて天竺ヨリ北ノ國あり九相トナケル其國ノ
 中ニ園あり吉祥トシテ其園ノ中ニ城あり城
 ノ王あり牛頭天皇トナケル又武塔天神トモ
 波瑠羅龍王ハ女ト后トシテハ王子トケルハ
 八万四千六百五十四神ノ眷屬ありト云テ御
 靈會レ時四糸京極トシテ栗此御飯トケルハ
 蘓民將來此由緒トシテ承ク公事根源
 カハミツクヤミツクノハミツクノハミツクノハミツクノハ
 末ニ祇園民部
 一為家此尋ヤリ

ありケル後ハ武塔天神我ハ速須佐維神カトト
 のたまふ今ヨリ後疫病天下ヨおケル時ト蘓民
 將來此子孫也トシテ弟輪とケルハ此災難トケ
 キンこのハミツクヤ又祇園ノ縁起ヨトケ
 いて天竺ヨリ北ノ國あり九相トナケル其國ノ
 中ニ園あり吉祥トシテ其園ノ中ニ城あり城
 ノ王あり牛頭天皇トナケル又武塔天神トモ
 波瑠羅龍王ハ女ト后トシテハ王子トケルハ
 八万四千六百五十四神ノ眷屬ありト云テ御
 靈會レ時四糸京極トシテ栗此御飯トケルハ
 蘓民將來此由緒トシテ承ク公事根源
 カハミツクヤミツクノハミツクノハミツクノハ
 末ニ祇園民部
 一為家此尋ヤリ

祇園臨時祭

十五日 御禊ふとの儀大さくハ平野

おのり使殿上代五位東遊とむる宣命

天治元年六月よりゆる又きふ走馬勅樂

なとあり天延三年北東遊の哥よひも

神代ハ八坂れと今日よりそ馬つ千本ハかまひ

八坂れ里とこいれ祇園也山城國愛宕郡八坂郷

とよふは神社と化れらる公事根源

暑日

石踏茂暑川原 夏行歩也 藻塩

夕立

夕立暮れ字二句嫌新式立の字と小二

句嫌也夕は五句嫌 夕時分小二句

新式抄 武抄云白雨と書来ハ山谷グ詩ありて

正字ふれ夕立字立の字は二句可嫌義なる新式

は共沙汰る夕立字は五句可去也云云不用

定立此字ハ二句は嫌さくき

ハ今さくあつても詮たり

夕立此事ぬり又夕立不可有降物ハ打越可嫌

秋夕の字立此字共は式は可嫌之暮れ字ハ

夕時分は五句可嫌夕はたけり清也夕は風

これあつて 無言抄 朝時分は二句嫌新式抄物ハ

も夕立ハあつて打越嫌とあれハ依句抄ハ夏

よなつてあつて去廻の事ハたけりハ夕立

をらあつては夏あつてとあつてはかくら

さハハたかたれあつて風雅ハ夏哥為兼

松原ハ風分すあつてあつては夕立ハ

夕立 稲妻とひまひくも夏也夕立

ては夏あつて無言抄ハあり一説ハ秋也案する小夕

立ハ七月初ころの事なりす中法中々とも新式抄見
ふり尾花なすふら合ころ哥もゆり万葉第十
夕立の雨或はらたうらことたまはく尾花或は赤と此は露おもしろ
又堀河次郎百首ハ夕立と秋の題よられり
蝸ハ二十一代集ハ夏は哥此部よもあつこよえらり
丈夫なとも蝸と夏の題よらり仍ハ此を
きこと定びたしやと其義哥乃部立ハ撰者の
種く習ひあつ事といり連哥ハ是を所用事と
りり又用の事もあつ也但二十一代ヨク互
の事秋よえと採ハ立言抄の説を其ま可_レ用之
次云新古今夏部よ
又此は子や庵の集此はよらりくはるらりり
なり

節折

此日 節折ハ命婦竹とりて参り
あて名口て涉つと決とひらくあつてよ
度あり二度をく、録と抄節折と
公事根源 儀式ハ事おん此ハ略記之雲圖
抄ハ圖あるハ年中行事哥合注云是神代
十一月二度あり年中行事哥合ハ冬此
也夏秋交代之時候也而夏秋金火与金相剋

辭

辭 辭 辭 辭 辭 辭 辭 辭 辭 辭 辭 辭
萬葉ハ和籙 萬葉ハ和籙 萬葉ハ和籙
也夏秋交代之時候也而夏秋金火与金相剋

故越夏之名、攘相剋之對、故云名越、之後也。八雲御抄云、神神とつひあるこじむ、後由はなうこひ、河邊より、一とて、麻此紫をとりてするをら夕又夜する事也、後撰よ。

かゝり何れんをきこすとして、る月とゆさてえんや、夜は、
題ハみさ月とく、一は河原より、りて、月乃あふれ
とて、こひ、りあう、こ六月、後、晦日也、也、こすとして、
月如何、らぬ、一云、定家卿此注云、これ月乃、
月之由、人疑之、古人六月之比、必此川原臨、
涼及、絲竹之遊、及、詩歌之興、恒例也、不限、
終皆、服、枝、長元比、或人記、御倉小舎人、來可、
月、枝之由、催之件、枝、六月十三日也、深塩草云、
ら、月もゆへある、
明題、
これ月の月、んとして、や、あ、り、し、
ハ、き、を、定、め、り、

大、後、ハ、晦日也、公事根源云、大、
朱雀門より、あ、り、て、枝、
を、天武天皇此御時、
この時、も、こ、神事と、
とも、この大枝ハ、
ハ、哥と、詠、す、
日大枝此祝詞と、
中、
月、
六月、

とさりてぬさし〜すす〜麻城〜とさる
二り年中の事并合よ

及引れあさの大ぬささる〜
官川より取や〜宗柳

茅輪 是牛頭天皇蘇民將來よ教へつる遺法
也疫病をよらん時蘇民將來の子孫也といひ

て茅代輪とつけハハ災難とらる〜
よ今と枝よ茅代輪と越取也

新千載入道前太政大臣哥也支木為家

伊勢川をんられよのり〜
年毎よる〜

人形也枝する人形とけりて身代災難と
形代

〜川よある事あり是は〜

は枝川〜の儀茅代未ん〜
拾遺恩草上定家乃哥也源氏東屋よ

み〜人の〜さる〜ハ方よ〜
見〜川もつるあ〜れひ〜

千五百番并合よ小幡後哥也げあ支木よ〜
あり大系千句よじ那〜

は〜この末よ〜
小蠅成神

豊葦原中國主彼國よハ螢火此かやく神及蠅聲
飛鬼おり〜とつり假令夏の蚊の〜乱〜悪神

の〜也是と〜
衆蚊成雷と〜ハひ〜事也〜ハち〜

権僧正云朝哥云

〜

〜

〜

河社

奥儀抄云二や一乃其事さあぐよりめまことこれ
ひ事也是ハ夏神樂也神樂ハ冬する事
とをのつらみら那事して夏たすする時ハさよれ
川乃乃らりしてすも也川乃乃渚ニ神四本とさくそれ
と柱してその竹と棚よりれくそれハ神供とハる
うる是とかいなりわらふことて庭火よ

新古今

とよ奇とらふこしは作法夏神樂此譜よんてら
神樂此家ハ秘する事也是多忠方グ説云云 下畧
猶神中抄よさあぐ此事あり夏

神樂非夜分水辺なり 師説

雲峯

陶淵明四時詩云春水涵四澤夏雲多奇峯
飲彫揚明輝今嶺秀孤松と古文前集よんて

とら六月照日此内分ハ白雲此空よかさなりて高
峯此やうなるん也丈夫第廿一衣笠内大臣哥
水音月よたりぬと見え大元よわや一と峯此やのふ
ハ奇判者先後朝臣云夏雲多奇峯とよ詩ハお
とひよるふや 略記之

薰風

六月よ少く涼風也薰風自南來と古文前集か
と小なり孔子家語曰龍者舞彈五絃之琴操
南風之詩註云南風之薰今
可以解吾民之愠今云云

涼

涼云詞清き事よひたりてハ夏よあつすとら
ハ詞証たり一只納涼よたりてまらるる可利
月一 露一 網代一 鴛鴨 かつら乃冬の
云詞たりぬじとひハ夏たり自余准之
流布

泉 泉殿も夏也 流布

清水掬 清水掬も夏也 流布

沅良之井 堀河院百首 俊頼 泉哥

定家公水色納涼と云題よりめり哥

又紀伊國の曝井と云名所もありこれハ

雜也哥ハ萬葉第十又支木日見より

扇 玉篇 作 翳 喻月 季

簾 織茂焉席 暑月鋪之 順倭名 床上卷收青竹簾 二朗詠をとりり青竹とりて作るといふ

汗 五言抄曰夏此部は出づる汗或説は常より人汗多しと

連哥よさやこれ差別しぬし只納涼

來奴秋 待秋

秋隣 秋近 秋遠 秋を記しつゝも同心して夏也

夏泉 也

曜凌 白い久しき夏は常夏と云り 顯註 密部 萬葉

六ごころありと四時羨ごりをり夏秋ハ哥よりし春 冬ハ未よりす 八雲御抄 但冬よりり後撰集第 十四云源よりありり此節十月よりり此二なるを

してして竹をれも

冬をれとまう地り小さはぬ色いじこまあつてひりかつまも
春ハ足しとて又拾遺愚草上ニ冬ノ哥去定家
花の中すれは冬の枯一花のけるをゆとなてし

石竹 萬葉ニ石竹の二字並やま
かしてしこ又只るてしこも点より

夕顔

―宿

植物也新式花となりても夏
かりタウがのしらゆる宿をり

飄花

走木茅亦六俊頼

ひきこ花さけるきしこまにまをりてふれぬぼるるるるる

瓜

麻

櫻

花は梅に似あつて頭昭きさくらあささけ、麻乃
くねとちりれ中しすけしるはすしりてわれ

あされゆきしとれと櫻麻といふは綺語抄云さくらあささけハ

あささけの中よ柄さしこしあささけ云と奥儀抄同之
以上袖中抄 不載異説取要記云

玉卷藟

葛れらりれたものやふまはすい色ハハハハ 奥儀
抄 六月也 藻塩草 或説四月にたり

射干

一名ハ烏扇 本草 西行家集
ふりさふハささ事かれや庭の向ようすあふれあそ志

藍刈

あわとむらりし
夏也花ハ秋也

藍干

かもし夏也新撰六帖
衣蓋内大臣哥云

くらゆかりに饒磨地置よわとあわれつてひのちよあへれ
くりすれれちゆはひらるあなをけけみあそられこあそん
な〜〜〜同集よ信實哥かり

蓮

―系

海松

らんらりらりれかろくひくも夏也 流布 土佐日記 貫之
おろろれきふひ日あまめくはうさうんまふひさう物と
是ハ入る也 六帖は下ろと松とこ松ひへりきれこあり
泳や漂遷
は哥ハ細流云海邊乃松なりと一入るるとはなり一不
變代枕詞也あやめハ菖蒲よとせとり云
はかおひくはるる并らうと松を成えまは

菱花

ひーとこりらも夏也 實ハ秋也
あさうとせしられとさひふらられてはの浮葉は蛙あり
此哥なりと千載集は夏乃部は入る又
ま本なるふ菱こりら夏代題よおとり

澤泻

こりらも夏也 一つきも尋其義と乃こま木才
ハ夏哥家集也
蛙あり 田中此井とに日なれてあしとるをひくはれ

定家

あしとるや下紫はゆれ社着花をよひてあさうとる
是ハ風雅集は春代部はいさり哥はハ社着花表の
題よこまも也 すすくかやれ證哥こも乃あふふ
て其季よ定むらふハあれ證哥よふ及也
四季准之取こ引用る哥ハゆありて載之

蟬

一時雨
蟬詞也 流布 声
時雨ハ似とる

大取虫

世俗ハ玉出れ火成りてとるらうんまよわんここ
とらりぬくとくハ灯は入る方と一あやといり
頭註 密勘 拾玉集 第一
方とすつとひら虫と表なれなくはれせ成かハあふぬ

腐草爲螢

月全ハ六月也 但和哥ハ六月ハ六月ハ六月
六月の小草朽よをり我宿れ草の團ハ螢といふ
六月の小草朽ハはれとてと雲とあさうとるはかりきり

まじくしうらふと二首より小堀河百首の身しくらぬありいそ
ひらりかあきと去りよ 志草のほけおま管とまらしてて心敬
いけくまゆをけ管死らんと云ふよ

ひさじよふたをくちていふあり宗祇 引むとらへ一人かづ
よゆきは其より走ハ朽て管死らんと云ふよ

練雲雀

河内カハチサウ子引れ糸の糸ひらり下より管死らんと云ふよ
初ハジメひらりとハ毛をわつとを糸をこし手引テり糸を
こしてハ経緒ツルれ事也定家三百首れ注よるごとり

鷓鴣バカ雁カガ

六月ムツキれまゆゆらぬ雲雀ウズ野ノますふも餌あつ
ひらりよあをせずして只すありとて管死らんと云ふよ
あつりして其後ほふと暑よハ雁カガれハありこなり同

